外科医でよかったスペイン留学

二〇〇六年卒　消化器・一般外科　三　浦　宏　平

二〇二二年春からスペインのムルシア大学付属ビルヘン・アリサカ病院、消化器・一般・移植外科に留学しています。この施設はムルシア州最大の基幹病院で、肝胆膵外科ではヨーロッパ有数のハイボリュームセンターです。スペインは世界一の臓器提供数を誇る移植大国ですが、限られた外科医のマンパワーでそれがどのように達成され運用されてきたのかを知りたかったことが留学動機の一つでした。留学開始から一年が過ぎ様々なことを経験しましたが、外科医になってよかったと思えることが数多くありました。留学の近況と共にスペインで感じた「外科医でよかった！」をお伝えします。

私は診療科長のパブロ・ラミレス教授のもと、クリニカルフェローとして肝臓チームに所属し病棟回診や手術に参加しています。当施設では教授を中心としたベテラン医師が執刀することが多く、私はおもに肝臓手術の第一～二助手、臓器摘出のレジデント指導などを行っています。留学開始当初から言葉の壁を感じない日はありませんが、いざ手術の場になると不思議と相手の意図が理解でき、手が動きます。手術という言語を越えたコミュニケーションツールを持つ外科医だからこそ、海外の医師とともに患者さんを治療することができ、そのことに日々大きな喜びを感じています。ただ、私がスペイン語をもっと勉強すればより多くの学びがあることは言うまでもなく、地元の学校であっという間にスペイン語を覚えてしまった娘たちに教わりながら、語学学習に励んでいます。

スペインでは頑張って働く人への評価が高いと感じます。先日、移植を含めて七件の肝臓手術を一チームでこなす忙しい一日がありました。最後はオペ室のスタッフや麻酔科の先生からあたたかい拍手をいただき、頑

カラスパラの闘牛場にて外科救護チームのメンバーと（右から２番目が筆者）

張ってよかったと心から感じました。働き手のモチベーション向上のためには、相手の労働に対して敬意を表することも重要であると再認識しました。スペインでも外科医は忙しい職業ですが、その分周囲からの信頼は厚く、外科医自身も誇りを持って働いているように感じます。肝臓チームのリカルド・ロブレス教授は、手術中に外科の素晴らしさを学生に力説しますが、その光景は何とも言えず爽快です。ちなみに日本では一日に七件も手術をすると術後管理や手術記録も大変ですが、スペインでは術後管理は病棟やＩＣＵのスタッフに一任し、手術記録などの書類作成もその場で完結するため手術室から直接帰宅できます。術後の業務がないことは想像以上に快適で、疲労を蓄積することなく翌日の手術に備えることができます。

外科医の性格は海外でも変わりません。スペインの外科医も人懐っこく、仕事も遊びも一生懸命で、明るく朗らかな性格の人が多いと感じます。そしてもちろん、かっこつけることを忘れません（術後は更衣室の鏡で髪形と鍛えた体を入念にチェックします）。休日にチームで食事をする際はお互いの家族やパートナーを呼び、みんなで楽しい時間を共有します。日本から来た私を彼らは外科のファミリーとして迎えてくれ、妻や子供達のことも常に気にかけてくれます。長期休暇のあとはチームのメンバーがおかえりのハグで迎えてくれ、仕事に戻ってよかったと感じさせてくれます。心地よいチーム作りを目指し、人の輪を大切にする外科医らしい性格にスペインでも救われています。

スペインではベテラン・若手を問わず多くの外科医が海外の施設に積極的に勉強に行きます。二週間～三か月程度であれば施設の大小に関係なく医師を派遣・交換するシステムが整備されており、このような短期留学を繰り返すことで新しい考え方や技術を自施設に取り入れることができます。留学先で得たコネクションを足掛かりに新たな研究プロジェクトに参加することも可能であり、また現状に満足できていない場合は自分にあった職場を探すこともできます。私の所属する肝臓チームのメンバーも日本、アメリカ、フランス、ドイツ、スイスなど複数の国への留学経験を持ち、様々な国の外科事情を知っているだけに考え方が非常に柔軟です。国同士の垣根が低いヨーロッパらしいスタイルですが、健全な職場環境を維持する上で非常に合理的だと思います。日本では留学はまだハードルが高く、外科医にとって身近なものではありません。しかし、日本の外科医を取り巻く環境を更に魅力的なものにしていくためには、一人でも多くの外科医が外に飛び出し、異なる文化を目の当たりにすることで現状に対する疑問を抱く必要があると思います。

世界の移植医療を牽引するスペインの外科医は、非常に忙しい中でも爽やかで幸せそうに働いていました。そのような外科医の在り方が実現する理由を言葉で表現し説明するのはとても難しいのですが、外科医としてスペインの医療や文化に触れ体感したことで、私自身は深く理解することができました。貴重な勉強の機会を下さった若井教授と医局の先生方、私を受け入れて下さったスペインの先生方と患者さん、海外でも通用する素晴らしい手技を指導して下さった新潟の先輩方、そして何よりも留学生活を一番近くで支えてくれた妻と子供達にこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（平成二十年入会）